

第3回がん哲学外来研修会と交流会 ～人と人の支え合い、心と心のふれあいを～

報告者：健康工房 SAKU

片桐孝子

開催の御礼とご報告

秋晴れの爽やかな2日間にわたり、「第3回佐久がん哲学外来研修会と交流会」を開催することができましたこと、心より御礼申し上げます。講師の先生方を始め、参加された皆様とも不思議な出会いに恵まれて交流ができ、心が豊かになる2日間でした。

「佐久がん哲学外来」「佐久メディカルタウン」は一人一人が大切にされる平和な地域社会への道であると思いました。それは、故若月俊一先生（佐久総合病院院長）が目指された「医療の民主化」の道を歩み続けることでもあり、社会の癒しが人々の癒しにつながるものではないかと考えさせられる研修会でした。これからも皆様とともに心ふれあう研修会と交流会ができますことを楽しみにしております。

2010年11月20日 学習会1日目

「医療現場の実情と私たちにできること」

小諸厚生総合病院地域医療連携室 主任 藤井健先生



藤井先生からは「医師不足」「医療崩壊」という話を伺い切実に受け止めました。

「よい医療を受ける環境を作るのは私たち一人一人の心がけ」とわかりやすく教えていただきました。正しい受診の状況判断（これで病院へ行ってもいいかどうか、病気の事をもっと勉強すること）、過度な医療への期待を避ける（人間の体はわからない事が多く、医療は万能ではないこと）等もお聞きしました。高齢者の多い地域だから「お薬手帳だけでも肌身離さず持ち歩きましょう」と言われたことも具体的で印象に残りました。今の医療現場の実情と私たちの意識改革の必要性を切々と知らせてくださり、もっと多くの方々と共有したい大切なお話でした。

「佐久の生活習慣とがん」

佐久総合病院統括院長 夏川周介先生

夏川先生からは佐久総合病院が行ってきた研究結果やデータに基づいたお話をいただきました。

「がん」と言っても様々な種類があり、「がん」=「死」ではないこと、また、佐久地域のデータはもとより全国統計に占める長野県の状況も学べ、とても参考になりました。また佐久地域における死因は「がん」とともに、「脳血管障害」などが多いというのも生活習慣や風土からくることだと思いました。



先生のお話の中で「日本は世界一の長寿国となりましたが、その要因は医療の進歩・栄養向上・衛生教育や衛生環境が良くなったことなどが挙げられますが、一番は60年以上、平和が続いたということですね。」とおっしゃいました。故若月俊一先生が戦後、貧しい佐久地域で医療を通じ平和な世界を希求されたことに思いを馳せました。佐久総合病院の歴史、若月先生と病院スタッフの農村医療活動ビデオも見せていただきました。



「横浜がん哲学外来での取り組み」

溝口修さん・和子さん、陣川さん、糸川さん、村上さん、日高さん、落合さん

「横浜がん哲学外来」を支えている、立場が異なる様々な分野の方々が佐久に足を運んでくださいました。がんで苦しみ悩む患者さんやご家族と樋野先生との対話の場を整え、温かい環境をつくりサポートしています。ドクターがよい働きが出来るように市民で支える、ひとつの形だと思いました。人と人、心と心がつながっていく気がしましたし、何よりボランティア皆様同志の支え合いや共感が、来られる患者さんにも伝わっているのだと思いました。



「佐久がん哲学外来の実践に向けて～暇げな風貌と偉大なるお節介～」

順天堂大学医学部教授 樋野興夫 がん哲学外来は樋野先生がカルテなしでがん患者さんとお茶を飲



みながら語る場です。「暇げな風貌」について「人は忙しそうなお人にはあまり話しかけたくないですね。だから医者も脇を甘くしていなければならぬ、暇げにしているということですね。しかし今の日本の現状では医者も忙しい。椅子から5センチお尻が浮いていますね・・・」。そして「悩みや苦しんでいる人を慰められるのは健康なお人ではないですね。

「-」にかけて「+」になるのは「-」です。「悲しみの人」でなければ患者さんなど話す相手は苦痛ですね。ですから聞く我々には訓練が必要ですね。」とお話くださいました。

がん哲学外来は「悲しみを知っている人・病を知っている人」なら誰でも行える、人間と人間の対話の場なのだと思います。さらに先生は、「佐久でも佐久総合病院を天守閣として、それぞれの場（喫茶店でもいいです）でメディカルタウンをつくられたらいいですね。よい医療の土壌がある上にまかれた種は100倍の実を結びます」と言われました。少しずつでも「佐久がん哲学外来」を実践していきたいと思いました。

「佐久から発信する医療の民主化～人と人との支え合い、佐久の現在・過去・未来～」



佐久総合病院地域ケア科 医長 北澤彰浩先生

佐久できめの細かい地域医療を日々実践する北澤先生。訪問先では1時間以上お話をすることもあります。手作りで出されたものは塩分や食習慣を調べるためにも必ずいただく、など現場のお話をお聞きしました。

先生は「医療」の定義に「寄り添い支えること」を入れることにより、医療が医療従事者だけのものではなく一人ひとりのものになり、自分たちのものとして考えるのではないかとお聞きしました。

そして、会場の中で偶然、北澤先生が関わる「がん患者会」の方がいらしたので、「寄り添い支え合う」ひとつの取り組みをその場でお話いただきました。

30年以上にわたり、病院とともに患者会を支えてこられる中で、一口に患者といっても、完治された方、再発された方、年齢が若い方などは同じ対応は難しいので、きめ細かい対応を心掛けているお話をいただきました。

